慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	野上彌生子『迷路』の基礎的研究 : 飯田義國・田辺元との関連について
Sub Title	Fundamental study on Yaeko Nogami's Meiro : focusing on Yoshikuni Iida and Hajime Tanabe
Author	小平, 麻衣子(Odaira, Maiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.117, (2019. 12) ,p.224- 240
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01170001-0224

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

野上彌生子『迷路』の基礎的研究

――飯田義國・田辺元との関連について――

小平　麻衣子

はじめに

野上彌生子が日中戦争時を描いた長編『迷路』は、「黒い行列」（『中央公論』一九三六年一一月）、「迷路」（一九三七年七月）を発表したのみで時局のために中断され、戦後の一九四八年、これを第一部・第二部として改稿出版したうえで（岩波書店）、続きを一九四九年一月から一九五六年一〇月まで、岩波書店の『世界』に掲載したものである。

拙稿「野上彌生子『迷路』論の前提」（『藝文研究』一一三号第一分冊、二〇一七年一二月）では、民族、階級、イデオロギーの対立を架橋することへの希望が、多くの挫折を経ながらも、なお愛の可能性として描かれていることを、作中人物を通して整理した。さらに、講和後に日本近代の歴史が問い直される状況の中で、『迷路』の作中人物が、批評家たちにいかに取り扱われたか、取りあげられなかったかについて、日本国家に関するジェンダーの象徴性の側面からふれた。本稿では、前者の構成実現にかかわるテクストを二種紹介する。一つは、画家・彫刻家である飯田義國の手記、もう一つは、哲学者・田辺元の戦後の一連の考察である。両者共に、主人公省三の小説終局での行為に大きな影響を与えている。それらとの

比較を行うことで、引き続き『迷路』の基本構造を明らかにしていきたい。

1. 飯田義國ノート「梨花」の再構成

この後の検討の必要上、前稿で述べた『迷路』の基本構造の要点を確認する。「血」のモチーフが、戦争や国際結婚で浮上する民族の違いを言い表すものとして、また一方では、奔騰する男性の情欲を言い表すものとして全編で使用されており、省三の妻となる万里子は、それと対照的な青色のイメージをまとって描かれている。小説は最後には、従軍し中国戦線にある省三が、スパイの濡れ衣をかけられて監禁されている中国人・陳を連れ出して自身も軍を脱走し、かつては転向を余儀なくされた左翼的な協同に再び賭け、停戦を呼びかける中国側のゲリラに合流しようとする。これは、万里子の素朴な信仰に近いヒューマニズムと一致するものでもある。万里子は祈りのあて先を聖母マリアとしているが、そのマリア・イメージはキリスト教の教義からは外れたものであり、日本人とイギリス人の両親の間に生まれた彼女は、中国の民衆とつながりを持とうとする省三と感応しあうことで、東洋と西洋をつなぐだけでなく、宗教とマルクス主義を架橋する存在として大きな存在感を持っている。「血」と「青い夢」は、それらのイメージとして、万里子において統一される。

ここではまず、省三の従軍時の情景の元となった飯田義國の手記について述べる。飯田義國（一九二三年～二〇〇六年）は、ステンレスを使ったパブリック・アートなどが有名な彫刻家、画家である。彌生子と彼との交流のきっかけは、すでに稲垣信子『「野上彌生子日記」を読む〈戦後編〉――『迷路』完成まで――下』（明治書院、二〇〇五年）で述べられている。一九五一年九月、北軽井沢の別荘で、知り合いを介して相知ったことからの縁である。稲垣が、彌生子の日記と、飯田の「北軽の時代」（『野上彌生子全集　第Ⅰ期　第一一巻』月報一九）、また朝木由香「年譜のためのノート」（『飯田義國・絵画』銀の鈴社、一九九九年）に引用された飯田本人の日記を参照しながらまとめたところによると、慶應義塾大学に在籍したが美術を志して東京芸大に入りなおした学生であった飯田は、慶應在学時に中国戦線に従軍しており、彌生子宅でその話をしていた。その後飯田が患い、彌生子は手当や医療費の援助をした。飯田の中国への体験を記したノート「梨花」は、そ

のお礼であったのかどうか、前後関係は定かではないが、一九五二年一月三〇日に彌生子に届けられた。彌生子は『迷路』執筆にあたっては、ノートの疑問点を飯田に直接質すこともあった。その後、飯田は、彌生子の息子・素一の尽力もあり、イタリアへ留学することになる。

稲垣はまた、飯田本人に借りたという「梨花」のコピーと『迷路』を比較し、参考にされたと考えられる数か所を紹介している。「梨花」は現在、長野県安曇野にあるTRIAD IIDA・KAN（公益財団法人ハーモニック伊藤財団）に所蔵されている。本節ではその調査結果について、稲垣の指摘と重複しない箇所を中心に、かなり限定的にはなるが、紹介したい。学用ノート統制株式会社、丸善製六十枚のノートであり、表紙に「昭和貳拾壱年三月」とあるのが執筆時期と考えられるが、裏表紙に「思い出も　はやうすれたり　一九五一、四月」ともある。飯田は天津、済南、徐州、南京、そして北京に戻って京漢線を石門、邯鄲、新郷、黄河と辿って漢口に移動しており、これは省三の行路を同様のものにした。

兵隊たちが駅々で肉マントウなどの食物を求めるシーン、列車から兵隊の白いシャツが印象的に残る情景、そして、「飼料挑発隊」において、粟殻や豚、卵を挑発し、そこをゲリラに襲われる一連の流れや、「ビーゴロ」をいち早く察知する中国人のキャラクターなどは、順番や細部を入れ替えながら、『迷路』に生かされている。ただし、飯田は、従軍体験をもとにした長編を書く希望があったといい、ノートはそのためのものだという。主語は「彼」で、従軍の単なる記録というよりは、友人の「F」に呼びかけた内心の吐露が挿入されるなど、なんらかの構成意図の感じられるものである。それを前提にだが、『迷路』全体の構成とかかわる重要な部分を三点挙げる。

一つ目は、「塔のある丘」での主要な舞台になるK鎮の景観である。「梨花」においては、「城砦のようなトーチカ」が「円錐形の屋根を空に向けて」おり、遠くには「ラマ塔と呼ぶのか仏塔と呼ぶのか彼は知らなかつたが」、古塔がある。低い街は「バロツク風なスカイライン」、高い塔は「ローマンカトリツクの尖塔」と表現されており、ヨーロッパ美術に関心のある飯田ならではと言える（三八～三九頁）。『迷路』において、後に触れる東洋と西洋の架橋は当初からの計画であったと推測されるが、それに接続されたとき、塔の描写は象徴的な光景として効果を発揮することになる。

また、二つ目は、飼料挑発における、民家の薯の貯蔵庫の場面である。『迷路』で省三が参加した挑発の場面では、床下の貯蔵庫に通じる穴の蓋に盲目の老婆が腰かけており、兵隊たちが彼女を突き飛ばして中を探ると、若い女が隠れている。彼らが掘り出すための円匙などを取りに行くわずかな間に、老婆は必死に蓋を戻すが、集合の号令がかかって意志が遂げられない腹いせに、兵隊は手榴弾を投げ込んで去る。切迫したこの場面は、「梨花」における別々の二つのできごとを接合して創作されたと考えられる。

馬にとび乗つた彼は、一人の老婆が小さな石に腰を下ろし、うづくまつてゐるのを気付いて、そつと近寄つてみた。この地方は、冬を越す甘藷を、地面に深くうがつた円筒型の穴倉に蓄へておく習はしで、その穴倉の天井にぽつこり小さな穴があつて、その穴から梯子亦は網で、身体の小さい子供を底へ下ろして、壺に甘藷を入れさせては上で之を引き上げる仕組なのである。

老婆は、そのやうな穴の蓋に成つてゐる石に腰を下ろしてゐた。……老婆は彼が近寄つても身動きもせずその小さなてん足の足元に眼を落してゐたが、彼は老婆の眼に涙が光つてゐるのを見た。……彼は激しいショックをうけた。（六六頁）[1]

彼は佇つたまゝしばらく女の姿を見下してゐる中に、抑へ難い或る欲望が血管の中に燃え始めた。彼ははつと思つた。しかしもう制し切れない力で或る一つの考へが彼の身体をしばつて仕舞つた。……言葉の判らない彼はそれをどう言ひ現はしたらよいのか見当がつかなかつた……唯言ひ難い羞恥と怖れを混へたその激情は、ますます募つてきて彼の顔は次第にほてつた。それは……女への愛情のやうな併し唯それだけと云ふよりもつと兇暴な劇しい情熱であつた。（中略）或る目的をとげようと云ふ狂ほしい考へが全意識を占領した。『女は逃げようとしてゐる。逃がしてはならない……自分は彼女に愛情を示してやらねばならぬ。鬼でないことを実証する必要がある……』彼は無意識に腰の拳銃に手をやつた。拳銃の柄を握つた彼はそのとき堪へ切れなくなつて女の顔から一瞬眼を外らした。その殺那（ママ）……腰を低めた姿勢で

女が脱兎のごとく扉口を跳び出して行くのを彼は認めた。悲鳴のやうな一種の叫びが後に残つた。彼は拳銃の柄を握つたまゝぼう然と同じ処に佇ちつくした。やがて落着いてきた彼の顔に……今自分の為ようとしたことがどう云ふ種類のことであつたかゞ明瞭に意識された。火の様な熱い羞恥と悔悟の念が彼の顔を真赤にした。彼は言ふべき言葉を知らなかつた。何といふことを!!逆流する血は渦を巻いて彼は殆ど倒れんばかりだつた。自分自身を斬つて捨てゝ仕舞ひたいほどの自嘲の心が身体一杯に流れた。心の奥にひそんでゐた情欲の姿を白日の下に眺めたことは言ひ知れぬ思ひを彼に与へた。『かつてこれほど卑しい想念が心の底にひそむで居ようとは夢にも知らなかつた。嗚呼。良心は傷ついた。このいまはしい記憶は生涯自分の心の鏡から消すことができぬ……』

（八九～九〇頁）

先ほども述べたように、「梨花」の「彼」が飯田自身であるとは限らないが、こちらでは、中国人女性に欲情を感じて愕然とするのは、主人公の「彼」自身であり、省三の方はここまでに阿藤三保子との情事に散々翻弄されながら、結婚後である従軍では、民衆の貧しさを深く憂えて挑発にも消極的であり、情欲に惑わされることはない。つまり、『迷路』においては、中国大陸での省三は、民族感情の対立と、その後の連帯の可能性を考えることに集中しており、情欲の問題は、日本に残る女たちとの関係性に集約されていると言える。

三点目として、ゲリラに襲撃を受ける場面を、次に「梨花」から一部引用する。

彼は、独りで思つた。……戦闘などゝ云ふものは別に怖しいものでは無い経験の無い中がこわいんだ。水泳のできぬ者が水をこわがるやうに。……戦闘の渦中へ入つて仕舞へば、愉快な位だ。あの一種の云ひしれぬ緊張感……生命の充実……切迫した情緒。一個のロマンチズム。……彼は生涯の最初の戦闘に彼の行為が彼自身を裏切らなかつたことに誇りを感じた。そして今迄の怖れがいはれの無いものであることを認つた。……彼は最早それを怖れる必要はなかつた。……戦闘は生命を堵（ママ）ける一個のトバクだ。冒険を求める子供つぽい本能とも一致する。あの一瞬の緊張の快感にくらべ

るものはない。そして亦内部に湧き起るヒロヒステイツクな感情……軽い自己満足……それらを自分は軽蔑しない。それらを否定するのは自分を戦場から脱落させることを知つてゐるから……。それらは安価な感傷に類するかもしれないことを充分自分は知つてゐる……。併し……

とも角戦闘の最中、国家だの主義だのを頭の中に書きつらねてたゝかつてゐる者はありやしない。戦闘は大人の一番面白い遊戯だ。

（九四頁）

省三の、それまで未経験だった戦闘への没入は、これにヒントを得ているが、「梨花」では自身の意識の持ちようの問題であるのに対し、『迷路』では、省三が思ってもみなかった敵意によってゲリラを射殺するまでにできごとが展開され、他者との対峙を大きく扱っている。つまり、民族間の敵意を身体レベルでの問題としたうえで、省三の理性的な思惟や判断に対する異物として、後々まで理性を懐疑させる躓きとしているのである。

以上のように、彌生子は、「梨花」の具体的描写を、本節冒頭に述べたような作品構想に従って配置しなおしている。もちろんそれを実現するために、彌生子は「梨花」が考えようとした戦時性暴力の問題を、扱い損ねたとも言える。そのことは、飯田が自己の執筆をすでに断念していたとはいえ、その体験を自分のものにしてしまった年長の作家の老獪さとともに、『迷路』の価値を一定程度引き下げるかもしれない。そして例えば、省三の脱走と響きあってしまう以下のような部分が、むしろ『迷路』の具体的な部分に相当箇所を指摘できないことによって、知識層の青年のある程度共通した思考法のようにみえるとき、事は複雑になる。

考へように依つては、あの気の弱いNのやうな男が、世界の真実を見てゐるかも知れないのだ。そして逃げ出すことの方が勇気の入ることかも知れないのだよ。ねえF。……何故と言つて、死ぬものは、自己の深い根柢に横はる自我の要求を無視してずるずると大勢にひきづられて行つて、とう〳〵死のさいころを□（注・一字不明）き当てゝしまつたもの

かも知れないのに反して、逃げ出す者は、従来の規約と慣習乃至国家の罰則を犯して迄も自我の要求に忠実だつたとも言へるぢやないか。尤も自我の要求なるものが単に、生命の本能に屈したと云ふだけでは、同情はしても、卑劣さを嗤はねばならぬけれど、……それが国家社会と世界との関係に於ける歴史的考察に根ざす真理の方向に飛躍することを認識してゐるものなら……立派な信念と称すべきではないだらうか。……吾々にはその勇気と識見が無いではないか。ねえF。

（八五頁）

次に述べる田辺元も、こうした国家と自我との問題を、青年たちに提起してきた知識人の一人だと言える。右の青年のスタンスは、青年たちの死を国家に対して捧げさせた戦中の田辺の論理の帰結とは反対のものであろう。そして、田辺よりははるかに単純に見えるこの思考が、戦後の『迷路』において、そうあるべきだったものとして見いだされるなら、田辺のような高度な学問について、当然ながらその抑圧性を考えなければならないからである。

2．戦後の田辺哲学からの『迷路』評価

彌生子と田辺元とのかかわりは、老年の恋として語られることが多い。北軽井沢の別荘での交流が、大きな転換を迎えたのは、一九五一年に田辺夫人が亡くなった後であり、彌生子の夫、豊一郎もすでに亡くなっている。ただここで取り上げたいのは、思想的な交流についてである。田辺の重要な思想に、生涯取り組んだと言ってもいい〈種の論理〉がある。〈種の論理〉は、一九三四年ごろから言われはじめ、一九三七年の「種の論理の意味を明にす」で明確な形をとり、戦中のエリート学生たちに影響を与えたが、そのことへの反省として、戦後の『懺悔道としての哲学』（一九四六年）など一連の仕事に鍛えなおされた。この戦後の過程が、『迷路』の成立と重なっている。よく知られてはいるが、田辺の〈種の論理〉について簡単にまとめたい。[2]

類と種と個の関係について考察したものだが、その関係とは、ヘーゲルや西田幾多郎に対する批判から構想された絶対弁

証法として説明されるものである。これは一方では、滝川事件などに象徴される政治と言論・思想の危機的関係、民族主義に基づいた全体主義が国家を戦争に向けて急速に押しやっていくなかで、国家をいかに理性的なものならしめるかという、社会的・実践的な意図を持ったものであった。そもそも、「社会存在の哲学」として企図されたものであり[3]、三木清や戸坂潤を周囲に見ながら、精神を重視するヘーゲルの弁証法が、現実との対立や矛盾をそれとして考えることなく目的論的に合理化してしまうこと、また逆に、物質を基底に置くはずのマルクス的な唯物弁証法が、真の実践の契機を欠いてしまうことの双方を、批判的に検証したものが絶対弁証法である。

〈種の論理〉において、類と種と個は、連続した関係における量による相対的な違いではない。それぞれはそれ自身の固有なる内容を持つものとする。そのうえで、個は種との対立において成立し、類も種の否定を通して成立し、いずれも否定を介して相互に関係しあう、〈絶対媒介〉と言われる関係性としてとらえられる。それは、「所謂絶対といへども、之を否定する相対を媒介することなくして直接に立せられることは許されない」(「社会存在の論理」一九三四～一九三五年。第六巻五九頁)、つまり何ものも直接には与えられたり前提とされることはないとする、弁証法の徹底である。田辺において、真の弁証法とは、矛盾を矛盾のまま包蔵していなければならず、しかも、止揚はしなければ弁証法ではない。止揚するものが何か〈有〉であるならば、それは絶対と言えども、他との依存関係にある相対の一つに過ぎない。可能だとすれば、矛盾を綜合するのでなく、両者とも否定することによってかえって生かすような、逆説的媒介の働きしかない。田辺が主張する絶対無であり、すなわち死即生である。これは宗教的にみえるが、個の働きであって、超越的なものや非合理に身をゆだねる神秘主義というのとは異なる。これが現実の政治である種や国家について展開されたのが種の論理である。種は、「血」や「土」に関連付けられる統一原理で、個を強制する。それぞれの種族はほかの種族と対立する特殊なものである。個は種から逃れ出ようとし、種は個を絶滅しようとして深刻な対立に陥るが、この交互否定が絶対否定的に主体の肯定に転じたものが、個の人類的普遍性の獲得、つまり類との統一において個がそれとして生まれなおすことである。田辺は、この理想的な類を国家として論じていく。

哲学的な論理の是非については専門家の検討に任せるしかないが、『迷路』との関連で当面問題なのは、その〈否定〉が実践的な〈死〉として語られ、国家が理性的なものとして語られるとき、個人が国家のために死ぬことを正当化する論理として、特に戦場に赴く学徒たちの説得につながったことである。先行研究において、〈種の論理〉の変遷についての立場は様々あれども、この点に意義を挟むものはない。[4] もちろん、上記のあまりにも簡略な整理でもわかる通り、田村のいう理想的な国家（類的国家）は、決して民族的な種と連続するものではなく、むしろ対立し、異なる者同士を媒介するものであるはずであった。[5] ただ、例えば田口茂は、田辺が、初期の構図における個を呑み込む種が、直接的に与えられてしまうことを後に自身で修正し、種に自己疎外態という主題を組み込んだことに、より国家の全体主義的機構と近くなる原因を求めているが、この複雑な相互の関係性は、個と種の対立を希薄化し、個と類の関係を相即的にした。[6]

それでは、戦後の〈種の論理〉はどこが変わったのか。端的に言えば、国家論と、個人の理性的な実践の後景化である。後者は、仏教的な用語をもっては「自力」から「他力」への移行として語られ、それとともに、自己を犠牲にする愛としての神の重要性が強調されることになる。政治的次元と宗教的次元の架橋は、以前から試みられていたものの、戦争において理性的な働きが実現されえなかった反省は、自己や国家を「根源悪」としてとらえなおさせることになったと言えよう。ここで田辺の思索の触媒となったのは、主に親鸞の「教行信証」である。個が死すことによって復活するという構図は戦前から大きくは変わらないものの、知性や理性の限界が組み入れられたために、絶対無が人間の行為を通してはたらくこと、私ではない如来の「心」が私の「心」に入り込んで働き、それが衆生に伝播する「還相回向」が重要となったのだという。[7] 同時に、キリスト教の「神の愛」「隣人愛」にも同様の働きを捉えている。

さて、ここまで田辺の〈種の論理〉をおおざっぱに追ってきたが、彼が彌生子に送る書簡では、彌生子が連載を進める『迷路』を、かなり彼自身の思想に即して読み解いていることが窺われる。だいぶ長いが、引用する。

奥様は『迷路』がリアリズムの要求に発しましたもの故、あれはあれで一応御纏めになり、哲学は哲学として別に御勉

強になる御つもりと仰せられます。しかし科学的リアリズムが、なんらか絶対性を要求するとき、二律背反を免れないことは、カントの批判主義の教えた所でございます。それを今日の蘇聯の政策転換、スターリン批判に徴するも、明白だと存じます。「生かそうか死なそうか」の岐路に御迷いになるのも、同じ二律背反ではございませぬか。しからば此際、科学主義リアリズムの限界を自覚自認なさって、その最後の帰結を、この立場の絶対否定、すなわちその死即生に御委ねになるのが霊的絶対無の転換ではございませぬでしょうか。その時無の積極的内容として還相せられるのは、すなわち無即愛の救済力でございます。具体的に申せば、『迷路』の主人公が、自ら進んで選ぶ死により、死すると同時に支那人（陳）を救い、更にその最後の浄化救済をもって、彼自身の妻に彼の復活不死を信ぜしめることができる筈ではございませぬか。蘇聯の政策転換を導くものは、マルクス・レーニンの理論の根本動機であった人類愛に外ならぬと存じます。この霊性自覚があるのでなければ、転換の帰結は相対主義に外なりませぬ。

（彌生子宛書簡、一九五六年二月二四日、『田辺元・野上弥生子往復書簡（上）』岩波書店、二〇一二年）

これは、戦争に批判的でありながら従軍する省三の行動に結末をどうつけるか、書きあぐねる彌生子に対し、とりわけ一度左翼思想に挫折した省三が、同じ思想を通じて、国家にとっては敵である中国人民の一部と行動を共にし、戦争に対峙するという構想について述べたものである。生死やイデオロギーの選択は不完全な弁証法だとして、田辺が説くところの絶対弁証法を小説の結構として試みるようにとの勧めである。

たしかに、省三は類―種―個の問題系を個人の生き方として具現化した格好の例だと言えよう。省三の郷里の町は、二分された勢力が政治・商機をめぐって争い続けており、土地に根ざし、個人を強制的に従わせる閉じられた社会は、田辺のいう種に相当する。田辺のいう意味ではいまだ種に近い作中の国家も、政治家・垂水や豪商・増井のように、このような郷里のつながりから派生したものとして描かれている。省三のみはそうした因習を破るべく、敵対する勢力の慎吾と接触を試みるし、省三が中国のゲリラへの合流を悩む際には、唐突であると省三に自覚されているものの、すでに亡くなった慎吾がゲ

リラにいるのではないかと空想される。こうして種の強制力を突破する個が、類という人間の普遍に向けて行動を開始すると言えるだろう。

そして、すでに述べたような関心から、田辺はたびたびマルクス自身を、不完全だとする唯物弁証法とは切り離して考えているが、[8] 書簡ではその通りに、省三の中国ゲリラへの合流を、マルクス主義というイデオロギーの選択とは異なる意義づけとして行うことこそ、本来のマルクスに沿うものだと指示している。彌生子がつけた結末は、田辺を満足させるものであった。

このたび御発表の御作を拝読致し、息もつけぬばかりの緊張をもって一気に読了、深き感動に打たれました。奥様の彫心鏤骨の御努力まざまざと拝せられ、衷心よりの敬仰に溢れざるを得ませぬ。久しき間の御苦心にふさわしきフィナーレと申上げたく存じます。小生にとり特に悦ばしく感ぜられましたのは、主人公の最後が実に立派にて、陳を救いながら自ら仆れた末期は、全く申分ございませぬ。小生がひそかに希って居りました浄化は、完全に達成せられたと存じます。（中略）今や奥様御自身の御構想が、完全にこの願を満たして下さいました。悦に堪えないわけでございます。

（彌生子宛書簡、一九五六年四月一二日、『田辺元・野上弥生子往復書簡（上）』岩波書店、二〇一二年）

小説という形式が、生涯悔恨を抱えた哲学者の慰謝となりえたということだろうか。

3．万里子における田辺哲学と『迷路』の亀裂

ただし、田辺的な思想が物語のプロットとして完成するには、万里子を待たなければならないはずである。万里子は、冒頭に述べたように、キリスト教とマルクス主義を止揚する存在である。主に、従軍する省三に留守宅から送った手紙の中で、マルクス主義を掲げる者たちが宗教に懐疑的であることは知っていると言いながら、「みなさんは御自身のことより、

世の中のためになることを考へたのです。貧乏で困つているものが貧乏でなくなり、お金があつて威張つているものが威張れなくなり、誰もが正しいこころで、同じようにしあわせに暮らされる世の中にしたいと考えたのですわ。（中略）みなさんは神様が望まれることを、人間の手ではじめたので、つまりは、同じことをしていなさるのだつて。[9]」と述べている。彼女の信仰は、聖母マリアのみを、子の母という立場から信じるもので、特定の集団の信仰の様式や、教会などの経済的組織を無視したものである。

また万里子は、省三が熱く語る、大友宗麟時代の日本が海外の文化やキリスト教と柔軟に交流していたという理想像を耳にし、そもそも日本人の父と英国人の母との間に生まれてその愛を疑わないから、省三との結婚は、洋の東西と、階級の橋渡しとして意味づけられる。田辺は、特に『懺悔道としての哲学』以降の時期に、キリスト教とマルキシズムと日本的信仰の媒介を考えている。著作は多いが、端的なタイトルを持つ「キリスト教とマルクシズムと日本仏教」（一九四七年）をみてみよう。「今や私の掲げた『キリスト教とマルクシズムと日本仏教』といふ論題は、三者が単に並列せられるのでなく交互に媒介せられて、弁証法的統一を形造る」（第一〇巻三一五頁）というように、田辺の思考の動機は絶対弁証法の理論的精緻化にあり、どのようなカテゴリーが媒介されるかは、そのつどの関心に従ってさまざまに変化するが、そもそも政治哲学と同程度に関心を寄せていた宗教哲学の深化であることは間違いない。

いはゆる啓示は、単に無媒介なる神意の自発性に成立するのでなく、相対的人間の自己をそれの否定的媒介として、神の絶対無がそれの否定に於て之を肯定し死に於て之を復活せしめる愛の実現たることを、意味するのでなければならない。（中略）無即愛として人間実存が懺悔道的自己放棄的に自覚するところの行的内容以外に、啓示といふものはあり得ない。（中略）科学の与へる必然の自由も、宗教の与へる真の自由の媒介なくしては、実は自由とはならぬわけである。

（第一〇巻二七七～二八四頁）

「神は我と汝の協同である」が、協同そのものを人格化することについては、間違いであり、「自即他、他即自の転換に成立する民主主義的協同態としての国家の否定的媒介性を、種の基体的直接統一と同一視し、前者の絶対無性を後者の相対的有性に頽落せしむる全体主義にも比せられる」（第一〇巻二九五頁）。だから、教義とも組織とも無関係な万里子の信仰こそが、マルクシストよりもマルクスらしいものとして、田辺の理想に合致としているということは可能だろう。

にもかかわらず、田辺は前述の書簡で、省三について手放しで評価したのに引き換え、万里子については触れていない。書簡が現存しなくても話題にならなかったとは限らないが、次のような書簡は、省三と万里子を別々に論じる必要を感じていなかったのではないかと類推させる。双方の犠牲的愛による相即とでも言えるだろうか。そして、仮にそうだとするなら、田辺の万里子理解は、実は『迷路』そのものとはだいぶ異なったものである。

彼女こそ唯一の犠牲者で、悲劇の主人公です。そこで小生は、飽くまで悲劇にふさわしい清く高い終末に達せしめたいと存じます。それには、青年の求愛に心を牽かれながら、遂にリビドを超えて、精神の要求に殉じ、むしろ二人の母と兄にして恋人なる青年との、何れもが示すことなき倫理性を、自らの一身に発揮して、全人類の罪を懺悔し、服毒（ギリシャ悲劇的）か、修道院入（クリスト教的）かの、終末に達せしめることが必然と存じます。これは小生の、この少女に代表せらるる女性一般に対する敬意と同情との、披瀝に他なりませぬ。

（彌生子宛書簡、一九五四年一〇月一一日、『田辺元・野上弥生子往復書簡（上）』岩波書店、二〇一二年）

これは、彌生子の発表されたテクストを読んだうえでのものではなく、それ以前にあくまで自己の予測や願望を述べたものであるため、『迷路』への理解とみるのは公平性を欠くかもしれないが、それにしても、彼によって理想化された万里子は、省三と同様に「懺悔」としての「死」を実行する。しかしながら、なぜ数多い女性人物の中で、最も地味な万里子が終局の重大な役回りを任せられるのかと言えば、前稿で述べたとおり、それは彼女についてだけ、愛と性慾が幸福な形で結び

ついているからである。恋愛についても奥手な万里子はしかし、結婚後は健やかな性欲を充足させていることが明示されており、子どもはその結実である。他のすべての人物が愛と性慾の不一致によって、また戦争によって死にゆくなかで、ただ一人、それゆえに生きている。省三が自らの死後の万里子の自死を心配することはあっても、万里子は服毒も、修道院入りも、しない。冒頭の図式をもって言えば、〈血〉を身に引き受ければこそ、他のすべてを包括できるのである。[10]

だが田辺が先ほどの書簡で「リビドを超えて」と述べているように、彼にとってこのような身体性は、まず克服されなければならないものである。田辺は〈血〉を、種的社会に関連付けて用いており、個を限定するそれをどのように超え出るかが〈種の論理〉の問題の出発点になっていた。むろん種の役割は複雑で、否定されるべきとは言え、否定が絶対弁証法において重要な役割を持っているとは言えるのだが、それ以前に、「肉に克つの困難もとより小なるものではない。併し（中略）情欲に克つの人も、その克己を誇る我性に支配せられざること稀」（「社会存在の論理」一九三四～一九三五年。六巻一二九頁）と言われるように、情欲は、思惟の前に否定されるべき卑俗な現象として、弁証法から締め出されていると言ってもよい。田辺が身体を考えなかったわけではない。むしろ弁証法には必須のカテゴリーだとも言え、[11]特に戦後に愛が説かれるとき、「他人を愛するとは霊肉一如の他人を愛する謂い」のように、身体も含められている（第一〇巻二九四頁）。だがそのように言えること自体が、身もふたもない言い方を承知で言えば、それは観念的すぎる身体だとでも言えるであろうか。田辺にとっては、省三の死を語れば万里子について語る必要がないのが両者一体の愛なのかもしれないが、作品構造上は、省三と万里子は死と生として対峙し、万里子の生き残りの可能性によって、かろうじて歴史への希望もつながれている。

そこで想起されるのは、田辺の思想が、戦後においても日本人の優位性とつながっていることである。

この新しき日本仏教の発展創造は、大乗仏教の無の思想を、世界歴史の新時代躍進に対する原動力たらしめる機会となるのではなからうか。おほよそ哲学思想に多少とも思を潜めたものにとつて、東洋的無が西洋的有の立場に匹儔を求むること困難なる深き思想に属することは、疑を容れる余地はないと思ふ。（中略）しかしてこの東洋的無を現に思想と

して活かすことのできるもの、日本人を措いて外にないことも疑いを容れないであらう。

（「キリスト教とマルクシズムと日本仏教」第一〇巻三〇四～三〇五頁）

この論考におけるキリスト教と仏教はそれぞれ、民族の伝統という限定／それからの離脱といった特徴が対照されて弁証法を形成しているが、どの宗教であれ負っているはずの政治的・歴史的経緯とは無関係に特徴が割り振られているようにみえ、それを前提に日本人の役割が強調される。だとすると、東洋の中でもとりわけ日本人の認識の優位性とは、具体的な歴史的営為と切りはなされていることと表裏なのではないか。つまり、この論考で日本人がキリスト教のようには実際の利害にからめとられないのは、実は敗戦によって、どの勢力の動向にも具体的には行動として参加することができないからでもある。そして、それならば、『迷路』のなかに似たポジションの人物を見出すことは容易である。徳川幕府方の祖先が維新によって敗者となって以降、その絶望により、政治的な影響力の行使も可能な身分でありながら、自らはまったく行為にあずからず、歴史的出来事の外に身を置く江島宗通である。世間との交わりを断つ規則正しい生活や、[12] 伴侶と言える女性への冷淡に見える態度も、田辺自身を彷彿させると言えないこともない。

彼の思想を小説世界として実現させることと、相対化も被る作中人物の一人として形象化することでは、まるで位相が違う。彌生子がどのように考えていたのかは知るよしもなく、さらに田辺から学びたいと願い、それを向上と考えていたことは容易に推測されるが、このようないくつかの次元へ分裂した影響の併存や、当初からの構想と、学びえた思想との不統一には、田辺とは異なる論理が余地として残されている。自己の思想体系の共有が哲学者の恋なら、これは思うほどには成就していなかったと考えた方がいいかもしれない。

註

1 ページ数は、飯田の記述に従う。抹消部分は省略した。

2 〈種の論理〉については、高坂正顕「田辺哲学とマルクス主義」、大嶋康正「絶対媒介の弁証法と種の論理」（『田辺哲学とは』灯影社、一九九一年）、藤田正勝「解説」（『田辺元哲学選　種の論理』岩波書店、二〇一〇年）、長谷正當「田辺哲学と親鸞の思想――「種の論理」の挫折とそれの新しい立場からの展開」（『日本の哲学』第一二号、二〇一一年一二月）などを参照した。また、以後田辺の引用は、すべて『田辺元全集』（筑摩書房、一九六三～一九六四年）により、巻と頁数のみ記した。

3 「社会存在の哲学こそ今日の哲学でなければならぬ。哲学的人間学でなくして、哲学的社会学が今日の要求であらう」（「社会存在の論理」第六巻五三頁）。

4 酒井直樹「「日本人であること」――多民族国家における国民的主体の構築の問題と田辺元の「種の論理」」（『思想』一九九七年一二月）、子安宣邦「反哲学的読書論（9）「種」の論理・国家のオントロジー――田辺元『種の論理の弁証法』」（『環』二〇〇六年）なども触れている。

5 「その（注・国家の）強制は直ちに自由に転じ、個人はそれに於て否定せられながら却て肯定せられて、自己犠牲即自己実現となる如き組織」（「種の論理の意味を明にす」一九三七年、六巻四五二頁）。

6 田口茂「田辺元――媒介の哲学　第三章　国家論の挫折と理性の運命」（『思想』二〇一六年二月）。

7 長谷正當前掲論文。

8 例えば「マルクスはマルクシストでなかった」（『哲学入門　哲学の根本問題』一九四九年）。

9 引用は、『野上彌生子全集』第一一巻（岩波書店、一九八一年）。

10 むろん、子どもを産む女性の身体性を至高のものとし、かつ、それがそのまま人類の普遍という観念と結びつくことは、現在からみれば偏向的で抵抗がある。生殖を意味化する〈人類という種〉という概念に対しては、丹野さきら「〈種〉とジェンダー」（『人間文化論叢』二〇〇二年）が批判している。

11 竹花洋佑「「種の論理」の生成と構造――媒介としての生――」（『思想』二〇一二年一月）を参照。

12 「先生は相かわらず御きげんにて規則正しい御生活と存じ上げますが」（彌生子田辺宛書簡一九五五年二月九日（『田辺元・野上弥生子往復書簡（上）』岩波書店、二〇一二年）。

付記　飯田義國資料の閲覧に関して、TRIAD IIDA・KAN（公益財団法人ハーモニック伊藤財団）関係各位に多大なるご尽力を賜りました。ここに記して謝意を表します。
また、青木言葉さんの調査へのご協力にも感謝いたします。